
西方源氏異伝 (架空戦記)

月影蒼雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

西方源氏異伝（架空戦記）

【Nコード】

N5114U

【作者名】

月影蒼雲

【あらすじ】

源玄叡、源平争乱の頃より伝わる太刀を引つ提げ、極東島から幾重もの

山海を越え、万里の道を経て戦火絶えぬ西方メディレ大河の地に漂り着き

南北の国家戦乱に与する……。

東西に流れるメディレ大河の北岸の聖王国「ロメルス」と南岸の大帝国

「セルコア」が戦いの舞台。

東方より来る異形の将、源氏の姓をもつ源玄叡が、中原国より随伴してきた
知将・楊利延と共に、南北二大国家の騒乱に乗じて栄達する姿を描いた

架空戦記。(全十話程度を予定)

魔法や怪物などのファンタジー要素はありません。
硬派な軍記小説を目指して執筆しております。

第一話 メディレ河畔

その東方の将、異形なる甲冑を身に纏い、見慣れぬ曲刀を天に掲げ河南蛮族の騎馬を統べて疾駆する。

黄土色に染まる砂塵の紗幕を破り、我が聖王軍の眼前に迫る。

その姿、魔王の遣わせし悪鬼のごとなり。

神よ、我らを守りたまえ。魔を祓う力を与えたまえ。

――ロメルス聖王軍、書記官パーロ・ヴァスケス従軍記より

メディレ大河の河畔に吹く三月の風は、まだ厳冬の冷たさが残っていた。

払暁の陽が、川面と河岸を赤銅色に染める。

メディレ大河は二つの国を分かť国境線であった。

広大な流域面積と莫大な水量を誇り、東から西へと悠々と流れている。

川幅は狭くて五里。広いところは十里にもなる。

対岸は遠くに霞み、人の眼では見えぬほどだ。

その雄大なメディレ大河の北岸には、聖王国ロメルスがあった。

レーテ教という救世女神レーテ神を信奉する教皇と、教団から選出された聖王が治める国家である。

河川の南岸にはセルコア帝国がそびえている。

太古より大河を挟んだ南北二つの国は常に睥睨し合っていた。

南は北を、北は南を虎視し、戦乱が耐えなかった。

南北両国の為政者達には野心があった。己が版図の、その対岸にある地を常に欲していた。

いつの世であっても、領土拡大がもたらす富に、王や廷臣らは魅せられる。

南北併合の偉業を成し遂げ、自らの名を後世に残すことにも躍起し、対岸の敵国を、隙あらば奪うことばかり考えていた。富と名声という名の美酒は、多くの血をもってしか購えぬと知りながらも。

そんな緊張した軍事情勢が百年余りも続いていた……。

三月中旬の早朝、メディレ河畔の南岸から十里ほど南下した地にセルコア軍の騎兵小隊百騎が集結していた。

「我が隊は、敵ロメルス軍迎撃の先鋒を仰せつかった。名誉と思え。進発せよ」

百騎の騎兵を統率する将は部下に令し、敵先鋒第一陣の歩兵隊五千へ向け出陣した。

この将の名は、源玄叡。源氏の姓を持っていた。

東方の果てにある島国「極東島」より渡来し、万里の道を越え、このメディレ河流域の戦乱地帯に渡ってきた。

身の丈百八十センチあまり、武人として見事な体躯である。

齢は三十と若くないが、精強で覇気に満ち溢れていた。

源平争乱の頃より伝わる深緑色の鎧を身に付け、腰に凶太い太刀を佩き、

大陸東方の高原地帯で産した悍馬に騎乗していた。

風に翻るセルコア軍旗を玄叡は一瞬仰いだから、北方に広がる大河を見やった。

「こたびの戦さ場は、メディレ河畔の南方五里ほどの平原。遮る物は無く

大軍であっても進軍は容易い、敵軍を迎撃するには不向きな場だな」

玄叡は真横に馬を並べて付き従う副官にそう呟いた。

その副官はやや嬉しそうな表情をしていた。

副官の名は楊利延、齢は三十ほど。麻の軍衣に胸甲のみという軽装

である。

宮廷の書記官を思わせる文弱そうな容姿が猛者の集う騎兵部隊の中にあつては珍しかった。

玄叡と同じく東方人だが、出身は中原国。極東島よりやや西方、この大陸東端の一大文明国である。

中原国の内戦の最中、傭兵である玄叡と出会い、共にこのセルコアの地に流れてきたのだ。

楊利延は静かに語った。

「敵ロメルス軍は、北方五十里の彼方にある敵の王都アークスより長駆して来た遠征軍です、

敵国に潜入させている密偵からの情報によれば、その総兵力は十萬大軍です」

玄叡は黙つて聞いている。

「ですが、幸い、十萬の兵が一挙に押し寄せることは無いでしょう。ロメルスの軍船は

多くて五十隻あまり、敵が一度に南岸に揚陸できる兵数は、せいぜい五千ほどかと」

「一度の揚陸に五千、後続の増援も五千ずつか。船不足で兵を小出しにせざるを得ぬというわけだな」

「はい。逐次投入された部隊を各個に討てばよろしいかと」

敵は歩兵のみを軍船に分乗させメディレ大河を渡渉させ、揚陸させていた。

少数の兵を複数回に渡つて波状に渡河させるのは兵学上有り得ない。各個撃破の対象となり、無駄死にさせるだけである。

「ところで、ロメルス軍にも優れた騎兵団はいるのですが、今回の揚陸部隊には

組み込まれていないようです」

楊利延の意外な言葉に、玄叡は目を閉じて思案にふけった。

「解せぬな、あの勇猛果敢なロメルス聖騎兵が此度の南征に参加せぬ道理は無い」

おそらく他の抜け道からセルコア領へなだれ込んでくるはずだ」

「やはり玄叡様も、そう思われますか」

「うむ。この地より東方二十里、メディレ大河最上流にある険しい山地を隠密裏に越えてくるであろう」

「アルプ山地ですね。かの地は険阻ですが川幅は狭く、浮き橋を架ければ渡河は容易です」

玄叡は軽く舌打ちした。つまりは、北岸より襲来した敵船団は明らかに陽動であつたのだ。

「つまりぬ戦になりそうだな、利延」

「しかし、たかが陽動と侮ってはなりません。こちらも兵数が少ないのですから」

「分かつている、頼りにしているぞ。副官殿」

極東島の剛毅な将は、中原国の副官の肩をたたき、笑みを浮かべた。隊長と副官というより、旧来の友どうしの談笑だった。

予め放っておいた数人の斥候が進軍中の玄叡の元に駆けつけ報告する。

「後続のセルコア歩兵部隊が、既に南方三里まで来ております。その数およそ一万」

「敵の軍船団が大河南岸に着岸、敵歩兵部隊は上陸し、すでにセルコア領内に侵入しつつあります」

「敵第一陣、メディレ大河南岸から更に八里ほど南下。規模は歩兵のみで五千。」

こちらに向かって進軍中、あと半時ほどで接触します」

報が告げられるたび、部隊に緊張が走る。

玄叡が率いる騎兵は僅か百騎。この寡兵で敵先鋒の歩兵五千を相手にする。

後方から味方の歩兵一万が接近している。容易ならぬ事態であるが今回の敵は陽動部隊、さしたる攻勢には出ないだろう。歩兵隊が草原の彼方に見えてきた。兵達が程よい緊張に包まれる。頃合を見て、玄叡は腰間の剛刀を抜き天にかざした。刀身が早朝の陽光を受け朱く輝いた。

「我が隊はこれより敵ロメルス軍先鋒を攻撃する、突撃！」

ときの声が上がリ、騎兵隊が駆けはじめた。馬蹄の轟きが草原に重く響く。

兵馬の隊列が楔の形を成して、獰猛な巨獣のようにロメルス軍へと襲い掛かっていった。

第一話 メディレ河畔（後書き）

筆者にとって初の軍記小説です。

至らぬ所や稚拙な点などありますが、どうぞご容赦下さい。

たくさんの方にお読み頂けたら幸いです。

第二話 老将エリゴール

聖王国ロメルスの人々が”河南の蛮族”と呼ぶセルコア帝国。そのセルコア帝国騎兵団の小隊長に、玄叡は任じられていた。

はじめは、歩兵として戦った。幾度もの戦場を経て、軍功を重ねた。すぐに頭角を現し、今では騎兵一個小隊百騎を統率する身となった。小隊長とは言っても、軍内における階級は低い。

底辺に近い身分で、与えられた軍権も僅かだ。が、これで十分だ。百騎ぐらいが丁度いい、とも思う。

大兵を預かると、運用や輜重などの雑務に忙殺されてしまう。そんな気苦労はしたくない。

いつも先陣を切って敵と対し、剣を思うさま振りたい。だからこそ武人として最前線に身を置いていた。

人馬一体となって、玄叡は河畔の戦場を疾駆していた。

巧みに馬を操り、剛刀を振り回し雑兵を薙ぎ払いつつ、玄叡は味方へ叱咤する。

「無理に敵を討とうとするな、味方の歩兵が着くまで、敵を足止めせよ」

敵歩兵は五千ほど、玄叡の騎兵小隊よりはるかに多い。

しかも方形の堅陣を布き密集している。

騎馬の速さを緩めずこれを襲い、敵に一撃を加えては離脱する。ひたすらそれを繰り返す。

敵の進軍を阻みつつ、可能な限り敵戦力の減殺に勤めた。

五度目の斬り込みを敢行する直前、偵察に出していた数騎が小隊の列に戻り、報告してきた。

「味方の歩兵部隊、南方半里に着陣。展開し始めました！」
後続のセルコア歩兵隊一万が、ようやくこの戦場に参じたのだ。

河畔の戦場に到着したセルコア歩兵を率いる大隊長は、
すぐさま麾下の一万に号令し、長槍を揃え、敵第一陣へ正面から悠
然と襲いかかる。

彼我の歩兵がぶつかりあい、方々で砂煙と血があがる。
強引に押しまくり、やがて敵を包むように押し始めた。

進軍を阻まれたロメルス第一陣は防戦に必死ではあったが
かろうじて陣列を保っていた。まだ潰走はしていない。
攻勢を受け流し、堅く守りながらじりじりと後退し始めている。
早めに後退して、後方に詰めている第二陣との合流を図るつもりだ
ろう。

そう玄叡はみていた。

「これより敵の第一陣の后背を衝く、続け！」
玄叡は麾下の百騎に号令し、馬腹を蹴って駆け始めた。百騎がこれ
に続く。

敵一陣と二陣の狭間に騎兵を割り込ませた。このような狭間は、
俗に死地と呼ばれる危険な場所である。前後から挟撃されるからだ。
だが玄叡は騎兵の速さを活かし、後方に控える第二陣と合流するま
えに、

第一陣の指揮官を見つけて斬るつもりでいる。

玄叡に従い併走していた楊利延は、後退中の敵の陣列に
僅かなほころびを見つけていた。
利延はいつも眼が効く。

「玄叡様、あそこが手薄です」
進言する副官に玄叡は「応」と軽く頷き、剛刀を振りあげる。突入

の合図だった。
それを見た従者がセルコアの旗を大きく振り、軍笛も吹いた。
玄叡の百騎は一矢の如く密集し、敵第一陣の隙間へと果敢に割り込んでいった。

「この部隊の長を探せ」

玄叡は部下に檄を飛ばした。見つけたら迷わず直ぐに斬れ、とも命じた。

この強襲のさなかも、セルコア歩兵の一万が絶えず敵を押し続けている。

正面からは歩兵が、後方からは玄叡率いる騎兵が、敵を挟撃する。ついに第一陣は隊列が崩れ、乱れた。南岸方面へと潰走する兵も出はじめていた。

逃げる歩兵たちの中に、やたらと体格の良い巨漢の将兵が混じっているのを見つけた。

兜の羽飾りも、鎧の装飾も立派だ。たぶん指揮官だろう。

玄叡は雄叫びを上げ、馬首をめぐらし、その巨漢へ向け一直線に駆けていく。

遮る歩兵を戦場刀で薙ぎ払い、この第一陣の指揮官の目前に迫った。そして馬上から凶太い声で叫んだ。

「我が名は源が太郎玄叡、その首もらいうける！」

巨漢の指揮官は、異形の鎧兜を纏う騎兵の姿に一瞬驚いていた。

慌てて玄叡に向き直り、槍で突いてきた。

玄叡は剛刀で敵の槍先を巧みに受け流し、撥ね上げ、返す一閃で指揮官の脳天を叩き斬った。

強烈極まる一撃だった。兜は割れ、原型がなかった。血と頭囊があたりを飛散していた。

指揮官の周囲にいた歩兵は、玄叡の魔的な剛勇に恐れをなし、

みな武器をうち捨てて逃げ出していった。
返り血を浴びて赤く染まった玄叡は、潰走する敵兵を見ながら悠々と馬首をめぐらした。

剛刀を天高く突き上げ、味方に号令する。

「大将は討ち取った。我らも後退し、味方の歩兵部隊と合流せよ」

指揮官を失った敵第一陣は敗走し、後詰の第二陣と合流し始めた。本来であれば、いま少し残敵を追撃し、兵力を減殺するべきではあったが、

味方の歩兵隊はすでに追撃をやめ、後退して陣を再編していたため、玄叡も自陣から突出する愚を避け、追うのを諦めた。

緒戦は一段落した。両軍とも陣を固めて膠着に入った。

玄叡麾下の騎兵は九十騎。この緒戦での被害は十騎ほど。軽微であった。

南岸をすでに進発していたロメルス軍第二陣の歩兵五千は、第一陣の敗残兵四千余との合流を果たした。その兵数、約九千。さらに悪いことに、南岸には、さらなる敵増援が押し寄せていた。ロメルス軍船団の第三波が、すでに南岸に着岸していた。揚陸した兵は隊列を組み始め、徐々に第三陣の五千が出来つつあった。

もしこの第三陣の編成が完了し、第二陣の九千余と合流を果たせば、セルコア軍は一万四千もの敵歩兵と対峙することになる……。

ふいに、一人の騎兵が玄叡のそばに寄ってきた。

「玄叡様、お話があります」

声の主は楊利延。玄叡が最も信頼している副官であり、優秀な参謀役でもある。

十年ほど前、利延が遙か東方の中原国に仕官した際、同じく官兵と

して

召抱えられていた玄叡と兵舎で出会ったのだ。

はじめは共に一兵卒であった。共に軍事訓練を受け、共に武芸や馬術を磨き合った。

暇を見ては軍内の書館に訪れ、兵略を学んだ。

中原国内の大小様々の戦に参じては、幾度も死線を越えてきた。

軍内において二人は上下の主従関係にあるのだが、同時に十年來の親友でもあった。

「明朝になれば、大河南岸に立っている敵は十万に達するでしょう」
後続する軍船の着岸頻度は高く、敵増援部隊の南岸揚陸は予想以上に早く、円滑だった。

ゆえに各個撃破するだけの時間的余裕が無いことを利延は説いた。

「敵兵の揚陸は非常に迅速です、ここまでとは思いませんでした」

「俺もだ、利延。こうしている間にも、敵兵は増え続けている」

玄叡も利延も当初は、河岸まで速やかに進み上陸途中の兵を討つ算段をもっていた。

「敵を水際で食い止めるのが肝心」

帝都を進発する前、玄叡は利延を伴って宮廷へ出廷し、セルコア軍幹部に対してそう進言していた。

だが、帝都の宮殿にいる軍幹部らは兵を出すことを渋っていた。

セルコア国の帝都カスサマル市。その絢爛たる城塞都市には、巨大で堅固な城壁があった。

高さ十メートルをゆうに越える石作りの防壁である。

「この厚い壁こそが、病巣なのです」

犀利な利延は、常日頃から玄叡にそう言っていた。

軍幹部や廷臣らは、いつも堅固な城塞都市の壁に守られ、安逸のうちに暮らしている。

カスサマル市が誇る大城壁に、あまりに恃み依存しすぎていた。

ゆえに廷臣らは、南征するロメルス軍を軽視し、戦局を楽観視してしまふ傾向があった。

為政者たるセルコア皇帝、マイルス二世ですらそうだった。

今回のロメルス軍侵攻の報が宮廷内にもたらされた時でさえ、出兵を渋るような態度を取っていた。

文武の両官も廷臣らも、皆揃って笑っていた。

この大城壁を陥落させることができるものかと。

戦いを厭う倦んだ空気が、安楽を貪るだけの俗な廷臣らの臭気が、宮廷に満ちていた。

源玄叡も楊利延もそんな空気に嫌気が差して、直ぐに引き下がり、急ぎ兵舎に戻ったのだ。

「我らのような下々の武官でも参内でき、皇帝陛下に拝謁し、直訴することさえ許される、

そういう宮廷の有りようは良いものだ。だが……」

「歪んでいます。あの廷臣どもには、聴く耳も、観る眼も無いのです」

「せめて先帝陛下がご健在であつたならば、いまま少し宮廷は廉潔であつたはずだ」

ふと、先帝マイルス一世の威厳のある表情を、玄叡は思い出していた。

先帝は勇ましい武人でもあつた。河南部の統一のため東西に奔走し、奮戦していた。

玄叡も利延も一兵卒としてマイルス一世に従いセルコア国統一戦線に参軍していたのだ。

「陛下のお側にいる者たちがいけないのです」

利延は憤りを隠せないようだった。

「マイルス二世陛下はまだお若いのです」

「お若い陛下を、近侍の奸臣どもが妄言をもって狂わせているのだろっ」

「さようです。敵はセルコア軍だけではありません。宮廷内部にも、敵は居るのです」

「獅子身中の虫か」

「はい。この虫どもはいずれ玄叡様にとつても、憂うべき災いとなるはずですよ」

政争や内部抗争は、およそ兵馬の戦いとは異なる。より複雑で陰湿なものを玄叡は感じていた。

「俺は武辺者にすぎん。政事や政争、宮廷内の謀略などにはとても対処できぬ」

不器用なのだと利延に苦笑して見せた。

「私が玄叡様をお守りしますよ」

利延は少し嬉しそうに言った。

「戦場では、私は玄叡様に敵いません。ですが、戦場以外の戦いは私にお任せ下さい」

結局、マイレス二世の命令により帝都カスサマルの北門から出立した兵は僅かで、

歩兵一万と、玄叡率いる騎兵百騎だけだった。

「その気になれば最大五万ほどはすぐに出せるはずだが……」

廷臣らのあまりの吝嗇を、玄叡は心中で嘆いていた。

敵の大侵攻に抗するにはあまりに寡兵である。

メディレ河畔の水際でロメルス軍を食い止めるには絶対的に兵力が不足している。

所謂「捨て駒」といつても過言ではないほどの、微々たる軍勢だった。

展開中のセルコア軍歩兵一万と玄叡の麾下百騎は、
メディレ大河南岸より十里まで後退し、対峙の陣を布いた。
両軍とも布陣をすで終えていた。

膠着し、互いの様子を伺っている最中、
玄叡は歩兵一万を預かる大隊長の陣へと駆けていった。

陣中の、最も大きな幕舎に行くと、入口の衛士が声を掛けてきた。
玄叡の纏う異形の甲冑を見て訝しく思ったらしい。

「所属と名前は」

「第一騎兵隊長、源玄叡である。エリゴール將軍にお会いしたい」

「失礼しました。どうぞ」

玄叡が中に入ると白髪の老将が出迎えた。

「おお玄叡よ、久しぶりじゃな」

「エリゴール將軍もお変わりなく」

「早々に、敵一陣の部隊長を討ち取ったそうじゃな、見事であったぞ」

「いえ、將軍が迅速に敵正面を圧して下さったお陰です」

エリゴール將軍。 齡六十を超える老将である。

玄叡に劣らぬ巨軀と白い美髯の持ち主だった。

かつてのセルコア国統一戦役においては勲功第一、セルコア建国の
元勲でもあった。

「先帝にお仕えしていた頃が懐かしいのう」

「先帝陛下は良きご主君、そして將軍にとっては良き戦友でもあら
せられました」

「陛下は常に陣頭に立たれ、それを見た兵はみな勇躍し、

母国統一と安堵のため、死も厭わず奮闘したものじゃ」

老将の心は遠き昔日をしばし遊弋していた。玄叡も利延も、かつては
エリゴール將軍の麾下としてセルコア統一戦役に参じていたのだ。

「將軍……」

「ああ、すまん。年寄りは昔話が好きでな。ところで何か用じゃったかの？」

「はい。將軍もお気付きとは思いますが、此度の戦、

小官も、そして將軍すらも、捨て駒として用いられております」

「ふむ」

老將軍はしきりに美髯を指で弄っている。玄叡は静かに言葉を続けた。

「武人たるもの死を厭いません。しかし無駄死には避けたいものです」

「わしも同感じゃ。だがこんな僅かの兵ではどうにもならんな。

敵兵は今も揚陸を続け、その数は膨れ上がっておるのじゃぞ……」

「いえ、敵の大軍に対抗する策がございます」

一瞬、玄叡を見つめる老将の目が輝いた。

「南の丘陵地帯で対陣するのじゃな？」

その言葉を聞いたとき、玄叡は内心嬉しく思った。

エルゴール將軍は、老いても鈍することのない名将であることに。

「はい將軍。かの地は起伏に富み、兵を伏せることのできる森林も多くございます」

地図を卓に広げながら二人は話し込んでいたが、

いつの間にか、歩兵隊の將校らも幕舎に入ってきていた。

しばし活発な軍議が交わされる。

「大軍が通過するには難儀な場所。しかもこの丘陵地帯はわしの庭も同然じゃ」

「地の利はこちらにあります。小官は今宵の夜陰に乗じて、

騎兵九十騎をもって、敵の兵糧庫を奇襲し、焼打ちします」

「できるかの？」

「今宵は闇夜です。小官は夜目が効きますゆえ」

玄叡は不敵に笑った。老将は嬉々として声を高めた。

「玄叡よ、カスサマル市の大城壁のむこうの、宮廷にいる腐った廷

臣どもを驚かせてやるうぞ」

捨て駒にされた武人にも意地と矜持があることを、帝都の者どもに
喧伝する絶好の機会だった。

(第三話につづく)

第三話「ルキス・フォルカス」

第三話「ルキス・フォルカス」

アレス・シャリア伯爵は、この寒さのなか兜も被らずにゆっくりと駒を進めていた。

それに付き従うは騎兵一万騎。「ロメルス聖騎兵」として近隣諸国に恐れられるこの軍勢は

アルプ山地の雪原を踏みしめるように整然と行軍している。

蹄と馬の嘶きが、吹き荒む山の風に乗って、岩と泥にまみれた雪原に広がっていく。

シャリアは練達の指揮官であった。

爵位を持つ貴族だが、戦歴の長さを感じさせる見事な偉丈夫で、ロメルス国においては「金獅子」とあだ名されるほどの武人でもある。金髪が、風に揺れている。

先行させていた斥候が馬を寄せて報告してくる。

「シャリア様、囲まれております」

「そうか……」

シャリアはさして驚くこともなく、報に対して淡々答えた。

おそらくこの地域に住む山賊の類だろう。気配は、感じていた。

「数は？」

「徒の者ばかりが五千ほど。みな獣の皮を着ております」

周囲の岩陰に、獣のような影が見え隠れしている。

「安心しろ、危険は無い」

狼狽気味の斥候を静めるような口調でシャリアは言った。

おそらくは、通行料でもせしめるつもりだろう。だからこそ、わざとロメルス軍の前に姿を現したのだ。

シャリアは旗手に合図し、追隨する騎兵一万を停止させた。そばに

いる副官らも、やや緊張した面持ちである。

「敵では無い、隊列はそのままだ。静かに待て」
山賊の出現にはやる兵達をなだめるような口調でシャリアは命じてから、馬を降りた。佩剣は従卒に預けた。

獣の皮を着た白髭の男が、たったひとりでゆっくりと近づいてきたのだ。足音が聞こえない。その身のこなしに非凡なものを感じた。歳は六十ぐらいだろうか。初老の、いかにも山賊の頭目らしき風貌である。

やがてシャリアのそばに来た白髭男は、まるで役者のような朗々とした声で話しかけてきた。

「これはこれは、シャリア伯爵。そしてロメルス聖騎兵隊の皆さん」
眼前の男は不敵な笑みを浮かべていた。

ロメルスの軍旗・・・白地に女神レーテの横顔が描かれた大軍旗を高々と掲げて行軍していたのだ。

しかも騎兵ばかりである。遠くからでも、どこの国のどのような軍勢であるかは、たとえ僻地の山賊であっても一目瞭然だっただろう。

シャリアは山賊の眼を 賊にしてはよどみの無い澄んだ眼を見つめながら、静かに語りかけた。

「訳あってこのアルプ山地を通行させてもらいたい……金はある」
「なにゆえに、これほどまでの大軍勢を擁して通行なさるのですかな？」

山賊とすれば当然の問い掛けであろう。

「案ずるな、おまえたちを誅伐するための軍では無い」

「では何故、ここを通ろうとなさるのですかな？」
重ねて問われて、やや自嘲気味にシャリアは答えた。

「セルコアという未開の国の、その蒙を啓くためだ。レーテの教えをもってな」

正直、シャリアはそこまで熱心なレーテ教信者ではない。彼自身、聖教の風などは国を奪う為の大義名分ではないことは十分に知っ

ていた。

ましてや山賊相手に、芝居めいた口調で決まり文句のような大義名分を言い放つ自分をおかしく思った。

「完全武装の一万騎をもって宣教し、蒙を啓くのですか……ずいぶんご立派な事で」

白髭の老人は皮肉めいた笑みを浮かべた。

「笑うな、こういう言い方は私の本意では無い。だが聖王軍を率いる立場上、こう言わねばならんだ」

「立場ですか、正直な御仁ですな」

互いに笑った。その声に、後ろに控える兵達の緊張が和んだようだ。この山賊の首領とは、何か通じるものを感じた。

「ロメルスという国を、どうお考えですか？」

「悪くは無い。が、少し形式に拘り過ぎるようだ」

「形式……と、申されますと？」

「形式が、聖王国の基盤を作り従順で清冽な民を育んできた。国を治めるに都合が良いのだが」

「それゆえの不都合も、何かとおありでしょうな」

この初老の山賊に心底を見透かされている。そうシャリアは感じた。なんとか話を逸らせようと案じて、シャリアは口を開いた。

「セルコアの通貨だ。百万コアはある。どうだ、通らせてくれるか？」

「足りませんな」

「なに？」

山賊の意外な言葉にシャリアは眉をひそめた。

「それでは、足りませんな」

「では、いくらだ？」

「百三十兆コア」

法外な金額だった。だがこの金額に、何らかの意図が含まれていることをシャリアは感じ取った。

セルコアに潜入させた密偵の報告によれば、セルコアの国庫に蓄え

られた財貨や金塊は、概算で百三十兆コアであるという。

シャリアの兵団にも、そういった敵国の機密は既に入っていた。

聖騎兵を率いる金獅子は、周囲の新雪に彩られた山脈を眺めながら思案し、やがて笑みを浮かべて初老の山賊の顔を見た。

「国庫を……いや、国を奪え、というのか？ この私に？」

山賊は目尻を下げて嬉しそうに笑った。彼自身の言葉の意図を理解してもらえたことに、そして聖騎兵を統べるこの男の鋭敏さに。

「後払いで結構ですよ」

「山賊よ、いやアルプ山地の民を束ねる者よ、そなたの名を聞かせてくれ」

「ルキス・フォルカスと申します、どうぞよしなに。それがしの手下に兵糧と秣を運ばせましょう。それと大軍の宿営に適した平原まで案内いたします」

「待て。まだ会ったばかりの、初対面のこの私に何故そのような野心を吹き込み、恭順までするのだ？」

フォルカスは心が躍るような口調で言った。

「シャリア様の御活躍はこのような僻地にも届いておりました。ですが、それがしが恭順を決意したのは、今日のこの場においてあなた様の眼を見たからです」

「眼？」

「眼の奥に潜む野心の光、その光の強さに感じ入ったのです」

見透かされていた。シャリアは内心でひやりとしたものを感じた。

「それがしは当初、シャリア様をレーテ教の熱狂的な心棒者だとはかり思っておりまして」

「……」

「シャリア様は北辺のルジア国からの度重なる侵略を、いつも身を挺して撃退なさいました。愛国の、あるいは信心の深さゆえのことだと思っております」

先年まで、ロメルス是最北のルジア国から攻め入られる事が多かった。ルジア国はその国土の大半が氷雪で覆われた寒冷地で、白狼軍

とい名の精強な騎兵隊を擁していた。

「貴族とはいえ、我がシャリア家は王室との血縁が無く、権勢からは遠い。ゆえに、戦功を重ねることではか栄達できんだ」

「そうでしたか。そんな事情がありましたとは」

「不思議なものだ」

「と、申されますと？」

「そなたとは初対面なのだ。なのに、初めて会った、という気がしない」

この老人とは、ずいぶん前からの既知の間柄であるかのように感じた。

「会うべくして、会ったのです。天が、我らとシャリア様めぐり会わせたのです」

「天、か……」

ロメルス聖騎兵は獣皮姿の山賊達に見送られながら進発した。アルブ山地を通りメディレ大河の源流たる幾つかの小川を渡渉し、フォルカスとの邂逅から三日を経ずして、一騎も損じる事無くセルコア領への侵入を果たした。

（四話へつづく）

• • • • •

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5114u/>

西方源氏異伝（架空戦記）

2011年12月12日23時49分発行